

# 西湖の屍人

海野十三

青空文庫



銀座裏の酒場バー、サロン船ふねを出たときには、二人とも、ひどく酩め酊いていしていた。

私は私で、黄色い疎まばらな街燈に照らしだされた馴染なじみの裏街が、まるで水の中に漬つかっているような気がしたし、帆村ほむらのやつは帆村ほむらのやつで、黒いソフトを名めい猿えんシドニーのように横よちよに被かり、洋杖ステッキがタンゴを踊りながら彼の長い二本の脛すねをひきずってゆくといった恰好かっこうだった。

私はそれでも、ロマンチストだから構かまわないようなものの、かれ帆村なるものは、商売が私立探偵ではないか。帽子の天頂てっぺんから靴の裏底まで、およそリアルイズムであるべきだった。しかるに今夜、彼はそれ等の特徴を見事ふりおとして、身体中が隙すきだらけであるかのように見えた。もし彼に怨恨うらみのある前科者ぜんかものどもが、短刀逆手さかてに現われたとしたらどうするだろうと、私は気になつて仕方がなかつた。

すると、背後から大声でもつて、警告してやりたい程、矢鱈やたらむ無性しようにに不安に襲おそわれた。この嘔氣はきけのようにつきあげてくる不安は、あながち酩酊めいていのせいばかりでは無いことはよく判つていた。近代の都市生活者の九十九パーセントまでが知らず識らずの間に

罹かかつているといわれる強迫観念症きょうはくかんねんしょうの仕業しわざにちがいないのだ。

帆村が蹣跚よろめくのを追つて、私が右にヨタヨタと寄ると、帆村は意地わるくそれと逆の左の方にヨロヨロと傾かたむいてゆくのだった。銀座裏は時刻だから、いたずらに広々としたアスファルトの路面がのび、両側の家はヒツソリと寝しずまり、さまざまの形をした外燈が、半分夢を見ながら足許あしもとを照らしていた。

酔つ払いにとつて、四ツ角かどは至極懐しごくなつかしいものである。三間先のコンクリート壁へぎたい体を舐なめるようにして歩いていた帆村は、四ツ角を見付けると嬉しそうに両手をあげ、まるでゴールのテープを截きるような恰好をして、蹣跚よろけていった。そのとき私は後からそれを眺めていて、急にハツとしたのだった。

——その四ツ角へ、別の横丁から、おかしな奴がノコノコやつてくる！

その姿は、本当には薩張り見ええないのだ。それにも拘らず、見えない横丁に歩いている人間の姿が見えたような気がした。いや、矢張りハッキリと見えたのだ。それは不思議なようで、別に不思議はないことだ。私達のように永年都会に棲んで、極度に神経を敏感以上、病的に削られて<sup>けず</sup>いる者は、別に特殊な修練<sup>しゅうれん</sup>を経<sup>へ</sup>ないでも、いつの間にか、ちよつとした透視<sup>とうし</sup>ぐらいは出来るようになって<sup>な</sup>っているのだ。これはいつも、そういう話の出たときに、私の言う話であるが、試みに<sup>こころ</sup>諸君は身体の調子のよいときに、ポケットの懐中時計をソツと掌<sup>て</sup>のうち握<sup>て</sup>って、

(はて、いま何時何分かなア——)

と考えてみたまえ、すると目の前に、白い時計の文字盤が朦もうろ

朧うとあらわれ、短い針と長い針の傾きがアリアリと判るのだ。

そうして置いて、掌てのひらを開き、本当の文字盤を見る。果然かぜん！ 一分

と違たがわず二つは一致している——これでも諸君は信じないというか？

四ツ角では、帆村ともう一人の黒い影とが、纏もつれあっているのだった。

私は、応援してやりたい気持一杯で、ペイブメントを蹴つて駈かけだしたのであるが、駈かけるといふよりは、泳ぐというに近かつた。

「ぼぼぼ僕は、いいいい生きていますでしようか」

と帆村の前に立つ怪<sup>あや</sup>しの男が、熱心に尋<sup>たず</sup>ねている。

帆村は、その男に胸<sup>むなぐら</sup>倉をとられたまま、

「ウウ、ううウ」

と低く呻<sup>うな</sup>っているばかりだった。

「ちよいと、僕の身体を触ってみてください。この辺を触ってみて下さい」

泣かんばかりに彼<sup>か</sup>の男は喚<sup>わめ</sup>くのであった。そして帆村を離すと、ベリベリと音をさせて、われとわがワイシャツを裂<sup>さ</sup>きその間から屍<sup>しかばね</sup>のように青白い胸部を露出させた。私は、初めてその男の姿をマジマジと観察したのだったが、思ったよりは遙かに、若い男だ



った。年齢としのころは二十四五でもあろうか。だが非常に憔悴しょうすいしていた。皮膚には一滴の血ちの気けもなく下したまふた瞼まぶたがブクリと膨れふくて垂れ下りさが、大きな眼は乾魚ひもののように光を失っていた。

「きみは、おお面白いことを云う」帆村が口のアたりについている涎よだれらしいものを手の甲かたで拭ぬぐい乍ながら云うのであった。

「生きているかア？ ウンここにあるのは、きみイの胸ではないか、だツ」

帆村は腰をかがめ、指先を自分の眼の前にチラチラふるわせて云った。

「では、僕の手を握ってください」

「よよし、握った」

帆村はよろけながら、怪青年の手を執とった。

「その手は、僕の身体つなに繋ながっているでしようか」

「ばば馬鹿なことを云いたまえ。ついていなくて、どうするものかッ」

「僕しやべが喋るときには、この唇が動いているでしようか」

「なに、唇が……。パクン、パクンあいたり、しまったりしてるじゃねえか、こいつひとを舐なめやがって」

帆村は、気合きあいをかけると、

「ええいッ」

と青年の頭をガンと、どやしつけた。

青年は痛そうな顔一つしない。

が、彼はたちまち恐怖の色を浮べて喚きだした。

「おお憎むべき幻影よ。わが前より消えてなくなれ。消えてなくなれ！」

彼は両眼をカツと見開き、この一見意味のない台辞を嘔きちらしていたが、臆てブルブルと身震いをする、パツと身を翻して駈け出した。

「それッ、逃がすな！」

と叫んだ帆村の声は、いつの間にか普段の、あの胸のすくような名調子に変わっていた。

「よよし、搦えてやる！」

と私は呶鳴った。

(これは冗談ごとではなくて、なにか事件かもしれない) 私の酔いは、やっと醒めかかった。

私は兵士のように身を挺して、怪青年の背後に追いつがった。右の肘をウンと伸すと、運よく彼の肩口に手が触れた。勇躍。

「ヤッ！」

と飛びかかった。

「無念！」

ひっぱずされて(アルコールの祟りもあって)身体が宙にクルリと一回転した揚句、イヤというほど腰骨をうちつけた。じつと地面にのびているより外に仕方がなかった。帆村が勇敢にも私の身体を飛び越えて、追駈けていったのがぼんやりわかった。だが、

こっちは全身がきかないのだ。どこに自分の腕があり、どこに自分の足があるのだから、皆目見当がつかなかった。気がついたのは——此際このさいのんき呑気な話であるが——なにかしら、馥郁ふくいくたる匂においとでもいいいたい香かおりが其の辺にすることだった。

(麝香じゃこうというのは、こんな匂いじゃないかしら)

そんな風なことを思いながら、夢をみているような気持だった。突然、意識が鮮明になった。朝霧が風に吹きとばされて、あたりが急に明るく晴れてゆくように……。

(こんなものを、頭から被かぶつてたじゃないか)

私は、真黒い布ぬのを、顔からとりのけて、上半身を起した。真黒い布と思つたのは、洋服の上衣うわぎだった。

(「そうだ。怪しい男を掴つかえたつけが、彼奴あいつの上衣なのだ!」)

怪あやしい香かも、その上衣から発散することが判つてきた。それにしても、いい匂においだが、なんとという異国エキゾチック情調的な香なんだらう。私の手は無意識に伸びて、その上衣のポケットを、まさぐつていた。

(「おお、なんだか、入っているぞ!」)

掌てのひらに握れるほどの大きさのものだった。出してみた。透すかしてみた。そして撫なでまわしてみた。何だか塚びんのようだ。

突如! 近くで私の名を呼ぶ声がする。私はムツクリ起上つた。

横丁をすりぬけて、飛鳥ひちようのように駈出してゆく人影! やッ、

彼奴あいつだ! 彼奴が引返してきたのだ!

そのあとからバラバラと追つてきたのは、帆村ほむらだった。

「元気をだせ！ 走れ、早く！」

と帆村は私の方に投げつけるように叫んで、怪人物の跡を追つた。そのあとから、真夜中ながら弥次馬やじうまのおしよせてくる気配けはいがした。私は弥次馬に追越されなくなかったので、驀まっしぐら地に駈けだした。今度は大丈夫走れるぞと思つた。

その鼠のような怪青年は、目にとまらぬ速さで逃げまわつた。街燈が黄色い光を斜になげかけている町角をヒョイと曲るたびに、「ソレあすこだ！」

と、怪青年の黒影こくえいが、ぱつと目に入るだけだった。私達と弥次馬とは、ずっと間隔かんかくができてしまった。そして、いつの間に

か、丸の内寄りの、濠ちかくまで来ているのに気がついた。

「あッ、しめた。袋小路へ入ったぞ。彼奴が、ひつかえしてくるところを抑えるんだッ」

帆村の声に、私は最後の五分間的な力走をつづけた。果然その袋小路の入口へきた。

「待て！」

帆村は、その入口に忍びよると、倒れるように地に匍つてそつと下の方から、袋小路をのぞきこんだ。

三十秒、四十秒、五十秒、帆村は動かない。

三分も経つてから、帆村は塵を払って立ちあがった。彼は私の耳許で囁いた。



コートの襟えりを立て、巻煙草を口にくわえた酔漢すいかんが二人、腕を組みあつて、ノツシ、ノツシと、袋小路まぎに紛れこんだ——勿論、帆村と私とだった。

その袋小路は、ものの五十メートルとなかった。両側に三軒ずつの家があつた。右側は、みな仕舞屋しもたやばかりで、すでに戸を締めている。左側は表通りと連続して、古い煉瓦建の三階建があつて、カフェをやっているらしく、ほの暗い入口が見える。その奥は、がっちりした和風建築の二階家で、これも戸が閉まつている。この袋小路のつきあたりは、お濠ほりだった。

そんなわけで、起きているのはカフェばかりだった。

私達は、カフェ・ドラゴンとネオンサインで書かれてある入口

を覗<sup>のぞ</sup>いてみた。

「まあ、いい御氣嫌<sup>ごきげん</sup>ね、ホホツ」

誰も居ないと思つた入口の、造花<sup>ぞうか</sup>の蔭に女がいた。僕は帆村の腕をキュツと握りしめて緊張した。

「君、君ンところは、まだ飲ませるだらうな」

「モチよ、よつてらつしやい」

「おいきた。友達<sup>が</sup>甲斐<sup>い</sup>に、もう一軒だけ、つきあつてくんろ、いかッ」

帆村が、私の顔の前で、酔<sup>よっぱら</sup>払<sup>ら</sup>いらしくグニヤリとした手首をふつた。私にはその意味がすぐわかつたのだつた。

入口へ入ろうとすると、

「おツとつとツ」

急に帆村は、私の腕をもいで、つかつかとお濠端ほりばたまででると、前をまくつて、シャーシャー音をたてて小便をした。帆村のやつ、小便にかこつけて、お濠の形勢を窺うかがっていることは、私にはよく判った。

入つてみると、そこは何のへんてつ変哲もないカフェだった。広いと思つたのは、表だけで、莫迦ばかに奥行おくゆきのない家だった。帆村は先登んとうに立って、ノコノコ三階まで上った。各階に客は四五人ずついたが、私達の探している相手らしいものの姿は、どこにも見当らなかつた。

「なに召上つて？」

入口にいた女給が、三階までついてきた。

「ビールだ。で、君の名前は？」

「マリ子って、いうわ、どうぞよろしく」

イトトン・クロップのお河童頭かっぱあたまがよく似合う子だった。前髪が、きれなが切長の涼しい眼とストレスのところまで垂たれていた。なによりも可愛いのは、その、発育しきらないような頤あごだった。

「おいマリちゃん」すかさず帆村が、彼女の名を呼んだ。「ここ、スペシャル・ルーム特別室があるんだろう。地下室か、なんかに、そこへ案内しろよ」

「地下室なんて、ないわよ。この三階がスペシャルなんじゃないの、ホホッ」

と、やりかえして、マリ子は下へ降りていった。

煙草の箱を探そうと思つてポケットへつきこんだ指先に、カチリと硬い物が当たつたので、私は思ひだした。

「おい、戦利品だ」私は、帆村の脇腹をつついて置いてから例の男の上衣から失敬したものを、卓子の下にソツと取り出した。

「なんだか、薬壘くすりびんのようだね」万事を了解りようかいしたらしい様子ごようの帆村が、低聲こごえで云つた。

「レットテルが貼つてある。ボラギノール」と私は辛うじて、薬の名を読んだ。

「ボラギノールって、痔じの薬じゃないか」

帆村は、謎々の新題にぶつかつたような顔付をして、一寸首を曲げた。

そこへマリ子がバタバタ階段をあがってくる気配がしたので、私は帆村に、あとを聞いてみる余裕もなく、その薬壇をまた元のポケットに収めた。

## 2

小石川の音羽に近く、

鼠坂という有名な坂があつた。そ

の坂は、音羽の方から、こひなただいまち小日向台町の方へ向つて、登り坂となつていたのであるが、道幅が二メートルほどの至つて狭い坂だった。登り口のところではそうでもないが、三丁ほど登つたところで、誰もがこの坂にかかったことを後悔するであろう。それというのが、この名うての坂は、そのあたりから急に傾斜がひどくなつて、足が自然に動かなくなる。そのうえに、路がだんだん泥濘ぬかつてきて、一步力を入れてのぼると、二歩ズルズルと滑りおちるという風だった。それを傍そばの棒杭ぼうぐいに掴つかつてやつと身体を支え、ハアハア息を切るのだった。気がついてあたりを見廻おどろわすと、こわそも如何に、高野山こうやさんに紛まぎれこんだのではないかと駭おどろくほど、杉けやきや櫟ろうじゆの老樹ろうじゆが太い幹を重ねあつて亭々ていていと聳そびえ、首をあげて

天のある方角を仰いでも僅か一メートル四方の空も見えないのだつた。そして急に冷え冷えとした山氣さんきのようなものが、ゾツと脊せ筋すじに感じる。そのとき人は、その急きゆう坂はんに鼠の姿を見るだろう。その鼠は、あの敏びん捷しょうさをもつてしても、このぬらぬらした急坂を駈けのぼることができないで、徒いたにたあえいでいる——これが鼠ねずみ坂ざかという名のついたりわかれであった。

この坂の、のぼることも降りることも躑ちゆう躑うちよされる、その中途に、さらに細い道が横に切つてあつて、その奥に朽くちかかった門柱が見える家があつた。その家の門は、月のうち、二三日を除いて、滅多めったに開かれることがなかつた。門の鈴がリリリンと冴さえた音をさせる日は、大抵たい月の上旬にきまつていた。もし氣をつ



けて垣の間から窺<sup>うかが</sup>っているならば、訪客は夜分<sup>やぶん</sup>にかぎり、そして年齢のころは皆、四十から下の比較的わかい男女であつて、いずれも相当の身姿<sup>みなり</sup>をしていることが判つたであらう。

帆村探偵も、その夜の客に交<sup>まじ</sup>つていたのだつた。

彼は階下の待合室で、順番を待つていた。一座には、袴<sup>はかま</sup>をはいて頤<sup>あご</sup>の先に髯<sup>ひげ</sup>を生やしている男が、しきりに心<sup>しん</sup>霊<sup>れい</sup>の物理学について論じていた。その隣りには、半年前に夫を喪<sup>うしな</sup>つたというまだ艶<sup>つや</sup>々しい未亡人だの、その姪<sup>めい</sup>にあたるという若い女だのが居流<sup>いなが</sup>れていた。帆村はひとり離れて下座<sup>しもざ</sup>にいた。手を伸ばすと、寒そうに光っている廊下<sup>ふ</sup>が触れる。その廊下を出ると幅の狭い段梯<sup>だんばし</sup>子が、二階へつづいていた。

「ボワーン」

と小さい銅鑼どらをうったような音響が、その段梯子の上から流れ  
てきた。

「貴方の番ですよ」

と、頤あごひげ髯ひげのある男がお喋りしゃべりを中止して、帆村の方に合図あいずをし  
た。

帆村は恭うやうや々やしく頭を下げると、しびれのする脚を伸ばして立  
ちあがった。

階下の明るさにくらべて、段梯子のうえは、暗闇にちかかった。  
彼は手さぐりに、のぼって行つた。最後の段をのぼりきると、目  
の前には異様な光景が浮びあがったのだつた。

十畳敷ほどの間が二つ、障しょうじ子があいていた。薄ぼんやりと明りがついている。小さいネオン燈とうが、シエードのうちに、桃色ももいろの微かすかな光線をだしていた。床とこの間を背まに、こつちを向いて坐っているのは、婦人だった。暗くてよくは判らないが若くはない。その隣には、懐中電燈の載のった小机こづくえを前まへにして頭の禿かぶげあがつた老人らうじんがいた。もう二人、背広姿の若い男おとこがいて、これは婦人の前まへに畏かしこまっていた。

「では大竹さん」と老人は、隣の夫人ふじんに呼びかけた。

「序ついでに、も一つやってあげて下さい」

大竹さんと呼ばれた婦人は、無言むげんで肯うなずいた。そのとき横顔よこがたがチラリと見えたが、四十を二つ三つ越したかと思われれるブクブクと

肥えた中年女であることがわかった。

あとそれにつづいて二人の背広男が、丁寧ていねいに頭を下げた。

「後あとのかた、まことに済みませんが、もう一つやりますから、少々お待ち下さい」

老人の静かな声に、帆村もまた無言で応諾おうだくした。

老人は席を立って、婦人の前にピタリと坐った。右手を婦人の額ひたいにあげていたが、やがてソツと引くと今度は掌てのひらを組み、胸のまえで上下に強く振った。

「昭和四年二月十八日歿ぼつす、俗ぞく名みょう宗清民そうせいみんの靈……」

老人の皺しわ枯れた声が終るか終らないうちに、

「ううツ、ああア」

と、大竹女史が うめきごえ 呻 声をあげた。

「それ出ました。声をおかけなさい」

と老人は手をあげて二人に合図をすると、元の こづくえ 小机の前にか  
えつていった。

「宗 そう 先生ですか」

声をかけたのは、三十四五の男の方だった。

「わしは宗じゃ。今忙しいから あと 後にこい」大竹女史が目 と を瞑じた  
まま、男の声で答えた。

「先生、こつちは そがていいち 曾我貞一です。 かんだにたろう 神田仁太郎を連れてあがりまし  
た」

「曾我貞一に、神田仁太郎？ そんな名は知らぬぞ」

男はそのとき何やら早口に云つたのだが、なにか外国語のようでもあり、なんの意味か判らなかつた。しかし大竹女史は、喜びの表情をあらわして、答えた。

「わかつた。なるほど曾我と神田か」と云つたが、そのあとで急に顔を顰<sup>しか</sup>めて、「わしは胸が苦しくてならん」と云つた。

「それは先生」曾我貞一と名乗る男は一寸<sup>ちよつと</sup>云い淀<sup>よど</sup>んだが、「先生は御臨終<sup>ごりんじゆう</sup>の苦しみを続けていらつしやるのです。目をお醒<sup>さ</sup>ましなさい」

「なに臨終だア？ 莫迦<sup>ばか</sup>をいいなさい生きているものを掴<sup>つか</sup>まえて、臨終とは何ごとかッ」大竹女史は、男のような険<sup>けわ</sup>しい顔付をして叫んだ。

「先生は、もう疾とくの昔に死の世界にゆかれました。もう三年も前に亡なくなられたのです」

「わしが死んだ？ 死んだものが、お前の顔を見たり、こうやってベラベラ喋しゃべられるかい。ハツハツハツ」女史は、目を瞑とじたまま後へ反そりかえって笑った。隣の老人が駭おどろいて、女史の身体を後から支さえたほどだった。

「いえ先生は既に亡なくられました。今日はそれをお教えして、死後の御立命ごりつめいをおすすめに來たのです。先生には死んだような気がなさいませんか」

「そういわれると、どうも、腑ふにおちないこともあるんだが……」女史は、首をすこし曲げて、何事かを考えている風だった。

「宗先生、試みに、御自分の体を触つてごらんなさい」

女史は、自分の胸のあたりに両腕を組むようにしてそこらを撫なでるのだった。

「わかりますか、先生、胸のところに、乳房ちゅうぶさがありましたよ」

「ほほう、これはおかしい」女史は自分の乳房を着物の上からギョツと握りしめて不審いぶかしげ氣であつた。

「先生は、幅の広い帯をしめて居られる。太腰ふとごしのまわり、柔らかい膝、そして先生の頭には、豊かな黒髪がある！」

曾我貞一の言葉につれて、女史は手を動かして、或は腰あるいのまわりに恐ろしそうに触れ、膝を押していたが、最後に両手をあげて、房ふさふさ々とした束髪そくはつを押おさえたときに、



「キヤツ」

と一いっせい声喚わめいた。女史は極度に興奮してその場に立ちあがろう

とするのを、隣席の老人は笑いながら後から抱きついて止めた。

「呀あッ、これは女の身体だッ。女の身体だッ。おお、わしの身体を、何処へやった。わしの身体をかえせ！」

女史は、裾すその乱みだれるのも気がつかず、われとわが身を、かきむしつた。

「先生、合点がてんがゆかれましたか」曾我貞一が憎いほど落付いた態度で云った。「先生の身体は、もう亡くなっているのです。それは、先生の靈せいを生せい前ぜんの世よへお迎えするために使メっている靈デイウ媒ムの御婦人の身体なのです。お判りですか」

「なに、<sup>メデイウム</sup>霊媒？ これはわしの魂が乗り移っている霊媒の婦人の肉体だというのか。ああ……」女史は頭をかかえて、其の場に俯いた。<sup>うつむ</sup>やがてその下から泣き声が洩れてきた。<sup>も</sup>獣の叫びごえに似た怪しい響をもった泣き声だった。

「ああ、いつの間にか、わしは死んでいた！」

女史は、<sup>なげ</sup>慨きのあまりか、容易に身が起せないようであった。

「どうです。今日は、その辺で止めて<sup>や</sup>おいては……」隣席の老人が、二人に注意した。

曾我貞一は、連れの神田の興奮に青ざめたような顔をチラリと見たうえで、老人に、止めることを頼んだ。

老人は、再び大竹女史の前に膝をつくとき、何やら呪<sup>じゆもん</sup>文のよう

なものを唱え、女史の額のへんを二三度、撫でるようにした。

女史は、元の女らしさに立帰って、静かに上体を起した。そしてケロリとした顔で、一座を眺めると、やや気まり悪そうに、はだけた前をかきあわせたのだった。

二人の背広男は、このとき丁寧ていねいなお辞儀をすると、席を立つた。場慣ばなれているらしく、始終しじゆうベラベラ喋しゃべった曾我貞一という男、それに反して一語も発しないで、唯興奮ただに青ざめていたような神田仁太郎と呼ばれた若い方の男——帆村はそれをぼんやりと見送っているような顔付をしていたが、その実、彼の全身の神経は、網膜もうまくの裏から、機関銃を離れた銃丸たまのように、両人目懸けて落下していたのだった。

\* \* \*

「そのときの若い方が、昨夜、銀座裏で逢つた彼の男なのさ」  
 帆村は、抽出ひきだしのなかから新しいホープの紙函かみばこをとりだすと、  
 そう云つた。

「神田仁太郎という男だネ」そういつて、私は、帆村の室にかか  
 っているブコバツクの裸体画らたいがが、正午ちかい陽光ようこうをうけて、眩まぶ  
 しそうなを見た。

「あの袋小路には、カラクリがある」

「どんなカラクリだい」

「そいつは判らん。だが追々おいおいわかつてくるだろう」

「神田仁太郎のことなら、小石川の、その何というのか心霊実しんれいじつ

験会けんかい みたいなところで訊きけばわかりやしないか」

「既にさつき調べてきた」帆村は苦りきって云うのだった。

「無論、住所は二人とも出鱈目でたらめだった」

「あの神田という青年は、なんだって、あんな恰好で銀座裏なんかに見われたのだい。あれは神田氏だけの問題なので、気が変になつたとか或いは酔よっぱら払はらっていたとか（ここで私はクスリと忍び笑いをしなければならなかつた）そういったことだけなのか。それともあれが、もっと大きな事件の一切いっさいだんめん断面だとも云うのかい」

「もちろん事件だ」帆村は言下げんかに答えた。「わるくすると、われわれの想像できないような大事件かも知れない」

「そんなことは、どうして判るのかい」と私は、帆村が迷惑か  
も知れないと思つたが、率直に尋ねた。

「それには色々の理由がある」帆村は、やつと気がついたように、  
一本の紙巻煙草をぬきだして、口にくわえた。「まず、あの怪青  
年の顔だ。あんなに特徴のある立派な顔は、珍らしいと思う。あ  
れでしょうすい 悴こしていなかつたら、貴人の顔だよ。それから例の心  
霊実験会だ。遂に一語も吐はかなかつた怪青年と落付しやべいて喋つてい  
た曾我という男との間に、ほのかに感ぜられる特殊の関係、それ  
にあの不思議な実験だ。また銀座裏で怪青年が僕になげつけた言  
葉は、戦慄せんりつなしに聴くことはできない。何か怖ろしいことが、  
現げんに発生している」

「君は、僕の嗅かいだ目の醒さめるような匂においのこととも忘れちやいな  
いだろうネ」

「うん、あれは僕の想像に、裏書うらがきをしてくれるようなものだ」

「ボラギノールの薬くすり壇びんは？」

「ボラギノールの薬壇？ そいつは僕の眼前がんぜんに見えるタツタ一本の縄だ、この一本の縄があるばかりに、僕はたちまち今日から何をなすべきかということを教えられている」

「それで何をしようというのだい」

「明日から当分、午前九時から午後一時まで、君はこの事務所へきて、僕の代りに留守番をしていてくれたまえ」

「それで君は？」

帆村はそれに答えず、煙草に火をつけると、パツパツとうまそ  
うに吸つた。

「君はカフェ・ドラゴンの女給がだいぶん、気に入つたようだつ  
たネ」帆村は、人の悪そうな笑をうかべて、私を<sup>わらい</sup>擲<sup>からか</sup>揄つた。

「ああ、マリ子のことかい」私は、しらばつくて、云つてやつ  
た。「あの子は、この事件に無関係だと思ふがネ」

「マリ子のごとは、そつとして置いて」と帆村は急に顔面をこわ  
ばらせて云つた。「あの古煉瓦<sup>ふるれんがだて</sup>建のカフェ・ドラゴンだが今朝  
起きぬけに、あの濠向うの仁寿<sup>じんじゆ</sup>ビルの屋上へ、測量器械を立て  
て、望遠鏡で測つてきた」

「ほう」私は彼の手廻しのよいに<sup>おどろ</sup>駭かされた。



「だが遺憾いかんながら、昨夜目測もくそくした室の面積に、煉瓦壁れんがへきの厚さを加えただけの数値しか、出てこなかった。つまり、隠し部屋があるだろうと思つたが、間違まちがいだつた」

私は感歎かんとんのあまり、黙もくつて頷うなずいた。

「その代り、すばらしい拾いものをした」

「む、なにを拾つたネ」

「カフェ・ドラゴンと、泥船どろぶねが沢山舫もやつているお濠との間に、

脊の高い日本風の家がある。ところがこの家の二階の屋根にすこし膨ふくれたところがある。鳥渡ちよつとみ見たくくらいでは別に気がつかない

ほどの膨らみだ。トランシットでビルディングの上から仔細しさいに観察してみると、その膨れた屋根は隣のカフェの煉瓦壁れんがへきのところ

で止っている。僕の眼は、煉瓦壁の上をスルスル匍はつてカフエ・ドラゴンの屋根に登っていった。すると其そこ処こに、大きな煉瓦積の煙突えんとつがあるのだ。ところがこの煙突の根元へ焦しやうてん点を合あわせ  
てみて判ったことだが、灰色のモルタルの色で、この煙突だけは、  
つい最近出来たものだということが判った。これは面白いことだ。  
あの二階家にかいやを建てたためにあの煙突ができたと考えることはどう  
だろう。その次には、二階家につける筈はずの煙突を、どうしてとな  
りにつけたのかと考えてはどうであろうか。さらにもう一つ、日  
本建の二階家になぜ煙突が入いりよう用なのであるかと考えては、いけ  
ないであろうか」

帆村は陶酔とうすい的口調で私に聴かせているのではなく、彼自身の

心に聞かせているのであることが明らかだった。

「すると、そのあたりに、怪青年が隠れているというんだね」

「うん、一度入った者は、いつかは出てこなければならぬ。そうだろう。あとは根気競べだ」

## 3

青年漢于仁かんうじんは、今日も窓のそばに、椅子をよせて、遙かに光る西湖せいこの風景を眺めていた。

空はコバルトに晴れ、雲の影もなかった。このごろは毎日お天気つづきだった。

湖の左手には、まゆずみ黛をグツとひきのばしたように、そてい蘇提が延々えんえんと続いていた。ややその右によつてほうせきざん宝石山の姿がくつきりと盛上り、ほしゆくとう保叔塔らしい影が、天を指さしていた。いつ見てもうるわ美しい西湖せいこの風景だった。

だが、いつ見ても変らぬ風景だったことが、かんうじん漢于仁には物足りなかつた。それにこの室の窓は、非常に厚い壁を距へだてた彼方に開いていたので、しぜん自然、視界が狭く、そうか窓下を覗のぞくことも叶かなわなかつた。

この室は、漢于仁の故郷であるところのせつこうしょう浙江省はこうしゅう杭州

の郊外、ばんしやうれい万松嶺の上に立つ、直立二百尺のろうだい楼台のうちにあつて、しかもその一番高いところにあつた。近代風の試みから、この室の天井は、厚い曇り硝子ガラスを貼りつめてあるので、日中は朝から晩まで、陽の光がさし、硝子を透とおして大空の青さが見えるようであつた。

せめてこの室の南側なんそくに、もう一つの小窓でもあいていたら、そこからは、風致ふうちじよう上よろしくはないかも知れないが、せんとうこう銭塘江の賑にぎやかな河面かめんが、近眼の彼にも、薄ぼんやり見えたことである。

（何故、自分の先祖は、このろうだい楼台の頂上に、たった一つの小窓しか、明けなかつたのだろうか）

漢于仁は、今から一千年も前に、この地を選んで、大土木工事を起した呉王ごおうの意中を測りかねた。だが当時は、唐の壊滅をうけたあとの乱国時代のことだから、いつ呉王を覘ねらつて敵国の軍勢が、攻めよせてくまいものでもなかつた筈だ。そのときに、鳴弦楼めいげんろうと呼ばれるこの高塔は、望遠鏡の力を借りて四十里かなた彼方に蟻の動くのも手にとるように判ったことだろうし、よしんば敵軍がこの塔下に迫つて、矢を射かけても、あたりは十尺もあるうという厚い壁へぎたい体だし、開いている窓はたった一つであるから、一筋の矢を送りこむことも不可能だったことだろう。そこに先祖せんぞの用心があつたかもしれないのだつた。

だが、今となつては、呪のろいの小窓以外の、何ものでもない。

「もつとも、私はもう死んでいる身なのだ」

漢于仁は、そこで大きな溜息ためいきを一つついたのだった。

帆村探偵が、漢于仁の顔を見たらば、どんなに驚くことだろう。

それは、いつか鼠ねずみ坂ざかの心霊実験会しんれいで逢い、それからのち、

真夜中の銀座裏で突飛とつびな質問を浴せかけたあの神田仁太郎という

怪青年に瓜二つの顔だったから。しかし、あれは日本での出来ご

とだった。ここは疑いもなく、西へ五百里も距へだった中華民国は浙せ江省つこうしょうでの話だった。

漢青年は、またいつものように、あの不思議な日以来の出来事を復習し、隅から隅まで緻密ちみつな注意を走らせてみるのだった。

その頃、彼は故郷の杭州を亡命して、孫火庭そんかていという家扶かふと共

に、大日本の東京に、日を送っていた。日本へ渡ったときは、まだ小さい少年だったので、日本語を覚えるのに余り苦勞をしなかつた。彼はいつしか、家扶の孫火庭が付けてくれた日本名の神田仁太郎という名を愛していた。孫火庭自身も日本人らしく曾我貞一と名乗つて、中国人らしい顔色を何処かに振りおとしていた。

二人の生活は、出来るだけ質素しつそを旨むねとした。孫火庭は、中国料理のコックと称して、方々の料理店を渡りあるいた。そのとき、漢少年を自分の甥おいだと称して、一緒につれあるいたのだった。

この数年は、丸の内のお濠ほり近くにあるカフェ・ドラゴンを買いとつて、二人は行いすましていた。漢かん于仁うじんは少年期をどびこして、いつしか立派な青年となつていた。そしてその瀟しょう洒しゃたる



風采と偉貌とは、おのずから貴人の末であることを現わしているかのようであった。彼は、いつとなく、銀座や新宿のカフエ街に出入することを覚えてしまった。彼の男らしい容姿と、豊かなポケット・マネーは、どの店でも女給達をワツワツと騒がせずには置かなかつた。

彼は、孫火庭の忠言も、どこに吹くかというような顔をして、毎日毎夜、東京中をとびまわるのに夢中だった。彼は遂に一台の高級クーペを買いこむと、簡単に乙種運転手の免状をとり、その翌日からは、東京市内は勿論のこと、横浜の本牧海岸、さては鎌倉から遠く小田原あたりへまでもドライブした。その結果、彼は知らず識らずの裡に、スピード狂になっていた。時速四十哩

などは、お茶の子サイサイであった。警視庁の赤オートバイに追お駆いかけられたこともしばしばだったが、彼はいつも、鼻先でフフンと笑うと、時速六十五哩マイルという砲弾のようなスピードで、呀あつと、いう間に赤オートバイを豆粒位に小さくすることが慣例であつて、その度毎に彼は鼻を高くした。

恰ちようど度そのころ、彼には鳥渡ちよつときが気懸りな事件が生じた。それは

家扶かふの孫火庭そんかていが、一週間ばかりというものは、行方不明になつたことだった。彼に行かれては、漢青年は浮木ふぼくにひとしかつた。

非常に心配して、行く末をいろいろと思わい煩わづらつているところへ、

孫火庭がヒョックリ帰つてきた。帰るには帰つてきたが、彼は二人の中国人を連れてきた。一人は、王妖順おうようじゆんといつて、孫と似

たりよつたり年の年頃で、もう一人は始めからマリ子と呼ぶ、まだ十七八の少女だった。彼等は外へ宿をとるといふ風もなく、カフエ・ドラゴンに寝泊りするようになり、王は毎日外出して夜遅く帰つて来る。一方マリ子と呼ぶ少女は、ドラゴンの女給となつたのだった。

そんなことは、漢青年にとって大した問題ではなかつた。困つたのは、孫の鼻息が、急に荒くなつたことだつた。彼はことごとくに文句を云つた。そうかと思うと、彼は数回に互つて、心霊実験会へひっぱつて行つた。そこで、漢青年はいく人となき、死んだ知友の霊と話をした「死後の世界」といふものが、なんだか実在するようちゆうに感ぜられて来たのだった。

漢青年は「死」という問題に、段々と恐怖を覚えずには居られなかつた。人間は、死んだ後のちでも、死んだことを意識しないでいるものだといふことが、心靈実験会の多くの実例によつて、判つてきたのだつた。そのことは一層、漢青年を脅おびやかした。彼は、京けいひんこくどういひんこくどう 浜まい国こく道どうを六十哩のスピードで走つていて、時々通行人を轢ひいたり、荷車に衝突して自分も相当の怪我をしたことが何回もあつたことを顧かえりみて慄りつぜん然とした。ひよつとすると、あのうちのどの事件かで以て、自分は既に死んでしまつたのではなかつたか。

そうした不安が、心の片隅に咲きだすと、見る見るうちに空を蔽おほう嵐らんうん雲うんのように拡がつていつた。彼は異常の興奮はっかんに発汗はっかんしながら、まず胸部を抑おさえるのだつた。それから、幅の広い帯を探

し、臀部でんぶを撫なで、頭髮かみに触れてみた。もしや指の先に、大竹女史の身体が触ったなら、そのときは万事休すといわなければならぬ。

いやいや、メデューム霊媒は、大竹女史に限ったことはないのだ。中には、男の霊媒もあることだった。どの霊媒を通じて、自分の靈魂が、娑婆しゃばを訪問するかもしれない。そう思うと、居ても立っても居られなかった。このごろでは自動車の運転も控え目にして、おとな温和しく、閉籠とじこもっている自室を出ると孫を呼んで、自分が生きていられるかどうかを、たず尋ねてみた。

孫の言葉だけでは物足りないときは、マリ子を呼んで、身体の一部さわに触らせた。それでも自信が得られないときは、気が変にな

つたようになって、深夜の街を彷徨し、逢う人逢う人に、自分が生きていかどうかを判定してくれるように頼むのだった。人々は誰もこの男を同情したり、恐ろしがったりした。

帆村探偵との出会いも、その発作中の出来事だった。

だが、その内に、いよいよ本当の運命の日が来てしまった。

ハッキリした記憶はない。何年何月何日だったかも知らない。

漢青年が不図眼を醒ますと、彼は見慣れぬ寝床に睡っていたことを発見したのだった。明るい屋根の下の室だった。グルリと見廻わすと、五間四方位の室だった。室内の調度は……。

「おおッ」

と彼は叫んだ。よく見ると、いちいち、古い記憶のある調度ば

かりだった。鶯うぐいすいろ色の緞子どんすの垂幕たれまく、「美人戯毬びじんぎきゆうず図」とした壁掛かべがけの刺繡ししゅう、さては誤あやつて彼が縁ふちを欠かいた花瓶かまでが、嘗かつて覚えていたと同じ場所に、何事もなかつたかのように澄あしかえつて並ならんでいたのだつた。すると、この室むろは？

「これは、故郷の杭州めいげんろうに建たつてゐる鳴弦楼なづかだ。少年時代なつかに遊あそびくらしした部屋こまどではないか、おお、あすこには、懐なつかしい小窓こまどがある。あの外そとには絵えのように美しい西湖せいこが見えるのだ。見みたい、見みたい、生なれ故郷こきやうの西湖せいこを！」

漢青年はムツクリ起きようとして、ハツと顔色かおいろをかえた。手が無い、足も無いのだ。いや身体からだ全体ぜんたいが無いのだ。「おお、これはどうしたことだ」

彼は、気が変になつたようになって、あたりを見廻した。室内の光景に、不思議はなかつた。そして、いや、あつた。あつた。寢床の上に、彼の足が、長々と横たわっていた。胴もある。おお、手も見えるではないか。

彼は、再び起きようと試みた。

だが、驚いたことに、眼でみると、そこに在るに違いない手だの脚だのが、動かそうとなると、俄にわかに消えてなくなつたように感じられるのだ。言葉を変えていうと、全身にすこしも知覚が無いとも言おうか、いや、それとも少し違うようだ。

気がつくつと、枕まくらもと頭に人間が立っている。見ると一人ではない。三人だつた。



その顔には、覚えがあつた。中国服に身を固めた孫火庭と王妖順だつた。もう一人はピカピカする水色の絹で拵こしらえた婦人服のよく似合うマリ子だつた。

「これは一体何事だい」

と漢青年は呶鳴どなつた。

「貴方様は、遂ついに亡なくなられました」

と孫が、いつになく穩おだやかな口調くちようで云つた。

「莫迦ぼかを云うな。お前達がよく見えている」

「貴方様はお氣付になりませんか」孫は顔を一尺ほどに近づけて云うのだつた。「貴方様は京浜国道で、自動車を電柱に衝突なさいまして、御頓死遊ごとんしばしましたのですぞ。貴方様は幽界ゆうかいにお入

りになって、唯ただいま今から幻影げんえいを御覧になっています。われわれも、貴方様の霊のうちのにのこる一個の幻影にすぎません。お疑いならば、お手をお触れ下さい」

そう云つて孫は、漢青年の手をとつた。彼は自分の手がスウと持上つて、孫火庭の身体を撫でているのを見た。しかし孫がそこにいることは、全く感ぜられなかつた。青年は唇を噛んだ。

「御覧遊ばしませ。王もマリ子も、貴方様の幻想につれて、これから御意のままの御仕えおつかを致すでございましょう。それからあの小窓から、外をお眺めなさいませ、楚提そていが長く連つつらなているのが見えます」

漢青年は、気がつくつと、いつの間にか窓辺まどべによつていた。そこ

から、西湖せいこの風光が懐しく彼の心を打った。こうして、漢青年の幻想生活が始まった。

彼は、思い出したように食事をした。死んだものが食事をするとは、変ではないかと考えた。

「それは幻影だ。食事は永い間の習慣だ。そのような種類の幻影は、中々消えるものではない」どこかで、そう囁く者があるようだった。

漢青年は、幻影を自由に楽しんだ。殊ことに彼にとって好ましかつたのは、マリ子を傍近く呼んで、他愛のない話をしたり、その果はてには思切った戯たわむれを演じてみるのだったが、マリ子はどんなひどいことにも反抗しないで、あらゆる彼の欲するところに従った。

反抗のない生活——そこにも漢青年は、幽界らしい特徴を発見した。

だが、それにも倦あきてくると、彼はあらゆるものに注意を向けた。ことに彼を喜ばせたものは、音響だった。どんな微かすかな音響であつても、彼は見遁みのがすことなく、その音響が何から来るものであるかについて、考えるのが楽しみになつた。ことに、どうしたわけか、この楼台ろうだいが震動すると共に起る音響に対して、興味がひかれたのだつた。うっかりしているときには、それを東京時代に経験した自動車の警笛けいてきのように聞いたり、或いは又、お濠ほりの外に重いチェーンを降ろす浚渫船しゅんせつせんの響きのようにも聞いた。しかし、のちになつて、それと気がつき、苦笑がこみあげてくる

のだった。この杭州の片田舎に、円タクの警笛の響きもないものである。

そのうちに彼は、知覚のまるで無い他人の手足のような四肢を、意のままに少しずつ動かすことを練習にかかった。それは彼の視覚の援助によって段々と正確に動いて行つた。それは非常に大きい喜びに相違なかつたのである。

この調子で身体がうまく動くようになったら、彼は何に措おいても、この天井の硝子板ガラスをうち破り、その孔あなから、楼ろうじょう上へ出てみたいと思つた。そして広々としたあたりの風景を見るときのことを考えて、どんなに嬉しいだろうかと、胸をわくわくさせたのだった。

ところが或日のこと、漢青年は困ったことに出逢ってしまった。それは不<sub>ふ</sub>凶<sub>と</sub>彼が、生前<sub>じしつ</sub>痔疾を病んだことを思い出したのだった。気をつけていると、寝具<sub>しんぐ</sub>や、床の上までもその不快な血痕<sub>けつこん</sub>が、点々として附着しているのを発見した。

彼は驚いて、マリ子の幻影を呼ぶと、患部<sub>かんぶ</sub>を拭<sub>ぬぐ</sub>わせた。彼女の言葉によると、その痔疾は、かなりひどくなっているそうである。

それだけならば、漢青年は、我慢をしているつもりだった。ところが彼は問題を惹<sub>ひきおこ</sub>起さずにいられないことになったというの<sub>いくたび</sub>は、幾度もマリ子に、痔の清掃<sub>せいそう</sub>を命じているうちに、いままでのあらゆる彼の暴令に、唯の一度も厭<sub>いや</sub>な顔を見せたことのない彼女が、この痔疾の清掃には極度に眉を顰<sub>しか</sub>めていることに気がつ

いたからであつた。

漢青年は遂に決心をして、家扶かふの孫火庭を呼んで、痔疾じしつの治療をしないと云つた。

孫は非常に困つたような顔をしたが、

「何分ここは片田舎のことでございますから、杭州へ出まして医師を見つけて来ます間三日間お待ち下さいまし」と云つた。

「何を措おいても、早くせい！」

漢青年は家扶を激励したのだった。

それから三日目のことだった。

孫はニコニコして部屋に入つてくると、痔の医師を連れてきた

ことを報告したのち、

「この医師は、口が利けず、耳も聞こえませんから、何もお話しなさってはなりませんぞ」

と、<sup>おごそ</sup>厳かな顔付をして附加えた。

そこへ王妖順が、一人の不思議な男を案内してきた。色の褪<sup>あ</sup>せた古い型の長衣を着ていて、いつも口をモグモグさせては、ときどきチュツと音をさせて、真黒い唾を嘔<sup>は</sup>いた。それは多分、よほど嘔<sup>か</sup>み煙草の好きな男なのだろう。彼は黴<sup>かび</sup>くさい鞆を開くと、ピカピカ光る手術道具をとりだした。王と孫が、漢青年の衣類を脱がせた。

（マリ子が居てくれればよいのに、マリ子はどこへ行ったのだら



う)

漢青年は、マリ子が今日は少しも顔を見せないのに不審をうつた。

孫と王とが、漢青年の両脚を抑えつけていると、その嚙煙草ずきの医師は、メスを探すやら、ガーゼを絞るやらで、ひとりで手てこま手古舞まいをしていた。

漢青年は、退屈を感じて、医師の顔ばかりみていた。ことにそのよく動く唇を呆あきれて眺めていた。

(これは変だな)

と、漢青年は胸のなかで呟つぶやいた。寝台の下でガーゼを絞しぼっている医師の目は、何事かを彼に訴えるかのように、動いていた。そ

この場所では、漢青年の脚を抑えている孫と王の視線が、全く届かないところだった。

怪しい医師は、警告の目付をしたあとで、唇をビクビクと動かした。

漢青年は、しばらくその唇の動くのを見ていたが、

(呀<sup>あ</sup>ッ)

とばかりに、心中驚いた。それというのが、この怪しい医師の唇は、煙草を噛んでいると見せかけて、唇の運動がモールス符号をうっているのだった。それを一々判読して綴<sup>つづ</sup>ってみると次のような文句になった。

「シユジュツゴ、ガーゼヲトツテ、テガミヲミヨ」

「手術後、ガーゼを取って、手紙を見よ」この信号は、繰返しくりかえし発信されたのだった。

口の利けず、耳の聞えない医師は、最後に大きいガーゼをあてて、その周囲を絆創膏ばんそうこうで止めると、遂に一語も発しないで、部屋を出ていった。孫も王も、医師を見送るためにこの室から出た。漢青年にとって、チャンスは今だった。

彼は手を伸ばすと、ガーゼを掴んだ。手を動かす練習をもうすこし遅く始めたのだったら、彼はこのチャンスを、むぎむぎと逃のがしたかも知れないのだ。

ガーゼの中には、果して小さく折った紙片しへんが入っていた。彼は口も使って苦心の結果、その手紙というのを開くことに成功した。

そこには、漢青年の脳髓を痺しびらせるほどの重大なことがらが認めしたたてあつた。

「今夜、電燈の消えるのを合図に、天井の硝子板ガラスを破つて、脱れのがいでよ」

漢青年は、三度ほど読みかえすと、その紙片を丸めて、ポンと口の内へ入れて、呑みこんだ。

脱走せよ、という者がある。何者とも知れない。しかしこれも「死後の世界」に於ける幻想であらうか。

これが生きていたのだつたら、軽々しい行動は考えなければならぬ。しかし、どうせ死んでいるものなら、二度と死ぬことはないだろう。無ぶりよう聊りように困っている自分のことだ。ではやつつけろ

——漢青年は決心した。

だが、今はまだ日にっちゅう中である。西湖の方を眺めると、湖面がキラキラと光っている。屋根の硝子天井の上からは、強い太陽の光線が、部屋中いっぱいにさしこんでいる。脱走しろという、夜や分ぶんになるのは中々だ。

そう思つて、漢青年は窓によりかかたまま、硝子天井のどの辺を破つてやろうかと上を見た。

そのときだった。

まさにそのときだった。

これが、天変地異てんぺんちいと、いうものだろうか。

奇蹟！ とは、この事であろうか。

信ぜられない！ 信ぜられない！

「呀あッ！」

漢青年が見上げていた硝子天井ガラスが、突然真暗まっくらになった。あの、カンカン日の当っていた硝子天井が、一瞬間に光を失ってしまつたのだ！

漢青年の毛髪は、あまりの恐ろしさのために、まるで針はりねずみ鼠ねずみのように逆立さかだつた。

「真逆まさか！」

窓の外を見ようとして振返つたが、そこには同じような暗黒があるばかりで、あの絵のような美しい西湖の姿は、どこにもなかった。

室内全体が、真暗まつくらだった。

こんな馬鹿げたことはない。漢青年は、自分の視力が一瞬に亡びたのかと思った。

それとも太陽が、突如として消滅し、世界が真暗闇かえに絞つたのかとも思った。

「ドドドーン」

という音響をきいたと思った。

漢青年は、ハッと気がついた。

「今夜の停電というのが、これだ。そしてこれには、何か根本的の誤謬ごびゆうがある！」

彼は持っていたニッケルの文鎮ぶんちんを、ヤツと天井と思われる方

向めがけて、投げあげた。

ガラガラと、硝子天井が崩れる音がした。

その途端に、パツと明るくなつた。

二度目の奇蹟！ 太陽は再び珊瑚<sup>さんさん</sup>々たる光線を硝子天井の上に降りそそいだ。

「畜生！ こんなカラクリに、ひとを騙<sup>だま</sup>しやがつてツ！」

漢青年は、壊れた天井の間から大空を見あげると、そこには碧<sup>あお</sup>い大空のかわりに、もう一層の天井があつて、この二つの天井の間に燭<sup>しよくりよく</sup>力の強い電球がいくつも点いているのが見えた。ああ、この偽瞞<sup>ぎまん</sup>にみちたインチキ日光に、青年は幾日幾<sup>いくげつ</sup>月を憧れたことだつたらう。



彼は一つ肯くと素早く、西湖を望む窓辺に駈けより、重い花壇を※止となげつけた。ガタリという物音がして、西湖の空のあたりが、二つに裂けて倒れた。これは、近視眼の漢青年を利用したパノラマでしかなかったことが暴露されたのだった。

外には、どうやら喊声があがっているような気配だった。

だが、どうしたのか、孫も王も、それからマリ子も上ってくる様子がなかった。漢青年は、片手にハンマーを掴むとヒラリと寝台の上に飛びあがり、ヤツと声をかけると、天井裏にとびついた。彼の全身にはエネルギーが、はちきれるように溢れているのが感ぜられた。

彼の手に握られたハンマーは、天井板を木葉微塵に砕いていつ

た。彼は勢いにまかせ、ドンドン上に向つて出ていった。

壁かべつち土つちのようなものがバラバラと落ち、ガラガラと屋根瓦やねがわらが

墜落すると、そのあとから、冷え冷えとする夜気やきが入つてきた。

漢青年はその孔あなからヒラリと外に飛び出したのだった。

「おお、これは」

それは見覚えのある銀座裏の袋小路ふくろこうじに相違そつういなかった。彼の立

っているのは、カフェ・ドラゴンとお濠ほりとの間にある日本建だての二

階家の屋根だった。ハンマーで打ちぬいて来たのは、一部がとな

りの煙突にぬける換気孔かんきこうだった。それは漢青年をして、杭州に

ある気持を抱かせるについて、二階家の中に建築した彼の密閉みつぺい

室しつの換気かんきを行う装置だった。

しかし、いつもの夜の銀座裏と違ふところがあつた。

それは、家の周囲に、幾千人の群集が集つていて、ワツワツと四方へ波のように動いていることだつた。どこから射つものやら、ときどきヒューツと呻うなつて、銃丸じゆうがんが耳をかすめて飛び去つた。

「おお、此処ここにいましたね、漢于仁君かんうじん」

いきなり漢青年の背後から声をかけたものがあつた。彼はギョツとして、振向くとそこには夜目よめにもそれと判る人の姿があつた。それは、例の怪しい医師だつた。

「これは一体、どうしたことなのです。そして君は誰です」漢青年の声は火のようであつた。

「あなたの祖先そせんの地が、漢于仁君の帰国を待っています」その怪

しい医師はパキパキした声で云った。

「なに！」

「一刻も早く御帰国なさい。だが此所ここで御覧のとおり、事態は極度に悪化しています。遁のがれる路は唯一つ、お濠ほりをくぐって、山やまし下橋たばしへ」

怪しい医師は、小さい包を、漢青年にソツと握らせた。青年は、その手を無言むごんの裡うちに、強く握りかえすと、そのままツツと屋根の上を走ると見る間に、ひらりと身を躍らせて、飛び降りた。大きな水音がきこえると、彼かの怪しい医師は、暗闇の中に、ニツと微笑したのだった。

「昨夜の事件は、当分記事禁止らしいね」私は、片手を繃ほうたい帯で痛々しく釣った帆村に云った。

「それほどのことでもないが」と帆村はニヤリと笑った。

「こつちで騒ぎを大きくしたようなものさ」

「ボラギノールひとびん一壺で、君があんなに器用な真似をするとは思わなかつた」

「君がああの壺を拾ってくれなかつたら、この事件は今頃どうなつ

ていたか、しれやしない」帆村は、大きく溜息ためいきをついて、そこに脱ぎすててある中国医師の服装の上に目を落とした。

「だが孫火庭が呼びに来てくれるまでは、気が気じゃなかった」

「あの風変りな新聞広告が、きいたのだね」

「ふふ」なにを思いだしたのか、帆村が笑った。久振りひさしぶりに見る

彼の笑顔だった。

「漢青年は、うまく脱走したかなア」

「大抵たいてい大丈夫だろう」

帆村は大して心配していない様子だった。

「それにしても、どうして孫火庭は、漢青年に背そむいたんだ」

「大きな金と名誉とを握らされたんだよ」彼は嘔出はきだすように云つ

た。「中華民國の崩壊をなんとかして支えようという某要人ぼうようじんが、孫を買収したのだ。王妖順はその要人の一味だ。もし漢青年が今こんにちに日のように切迫せつぱくした時局を知ったなら、彼は立ち処たどころに故山こざんに帰り、揚子江ようすこうと錢塘口せんとうこうとの下流一帯を糾合きゆうごうして、一千年前の呉ごの王国を興したことだろう。それは中国の心臓を漢青年に握られるようなものだ。だから当分のうち時局の切迫を漢青年に報しらせずしに置くことが、必要だったのだ。そうかと云つて、彼の生命を断たつことは、今日あの辺に巨富きよふを擁ようしている大人連たいじんれんの怒りを買うことであつて、それは不利益だ。そこで漢青年を、ソツと幽閉ゆうへいして置くことになつたのだ。それも普通の方法では、漢青年の疑惑を避けることができないから、あのような面倒な道具どうぐだ

建てをし、彼の青年の知覚を鈍麻どんまさせて、あの狂言をうったのさ。

これは中国人でなければできない用意周到ぶりだよ」

「すると、マリ子という女は、一体どうしたわけのひとなんだね」

「あれは、すこしばかり儲け仕事もくをした女にすぎない。無論中国人ではなく、われわれと同じ国籍をもっているんだよ。事件の中に若い女が一人とびだすと、すぐその女が主人公ヒロインになってしまうことが世間には多いが、今度の事件では彼女は一個のワンサ・ガールに過ぎなかった。殺人がなかったことと、それとが、今度の事件の二つの特異性だったとでも、こじつけ迷説めいせつを掲かげて置かかね。はっはっは」







# 青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第1巻 遺言状放送」三一書房

1990（平成2）年10月15日第1版第1刷発行

初出：「新青年」博文館

1932（昭和7）年4月号

入力：浦山聖子

校正：土屋隆

2007年8月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 西湖の屍人

海野十三

2020年 7月12日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>